様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　5　月　23　日現在

機関番号：12701
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20730328
研究課題名（和文）日比国際児のアイデンティティ構築に関する日比比較研究
～支援組織の役割に着目して
研究課題名（英文）Study on construction of Japanese Filipino Children(JFC)’s identities
:focusing on the role of support NGO
研究代表者　小ヶ谷　千穂（CHIHO OGAYA）
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：00401688

研究成果の概要（和文）：
1980 年代半ば以降、エンターティナーとして日本で就労するフィリピン人女性が増加の一つの帰結として生まれてきた「日比国際児（Japanese Filipino Children :JFC)」については、これまで「子どもの権利」の枠組みから論じられてきた。しかし本研究によって「日比国際児」は、その存在が日比間の人の国際移動の一つの帰結であると同時に、トランスナショナルな社会運動の中で生育しアイデンティティを構築してきた子どもたちでもあることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
JFC (Japanese-Filipino Children) , especially those who were grown up in the Philippines as illegitimate child of their Japanese father and Filipino mother, is one of the consequences of feminization of migration in Asian region. However, it does not only imply the result of the movement of women entertainers. JFC have been raised and have constructed their identities in the transnational social space through the support NGO networks and, in this sense, their identity construction process is one the results of civil society’s response to the migration and children issue.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：国際社会学
科研費の分科・細目：社会学

キーワード：
日比国際児、フィリピン、国際移動と子ども 、 支援組織

１．研究開始当初の背景

1980 年代半ば以降、在留資格「興行」でエンターティナーとして日本で就労するフィリピン人女性が増加するのに伴って、主に日本人を父、フィリピン人を母とする「日比国際児（Japanese Filipino Children :JFC)」がいわゆる「社会問題」としてフィリピン、日本の双方で取り上げられるようになった。フィリピン、日本においてともにその実数すら把握されていない（通常在比数万人と言われている）「日比国際児」問題はこれまで、１）日本国籍取得をめぐる国際婚外子の権利問題、及び２）日本人父親からの養育放棄の問題、として、「子どもの権利」の枠組みから議論されてきた（国際子ども権利センター編『日比国際児の人権と日本』明石書店、1998 年)。

しかし、日比双方の支援団体を中心にした問題提起・報告型の研究が積み重ねられてきた一方で、「日比国際児」が分析的概念として社会学的に検討されることはほとんどなかった。実際、「日比国際児」とは様々なカテゴリーを含んだ総称であり、条件も明確ではないまま使用されることで、逆に問題の所在や実態を曖昧なままにしてきたと言える。また、「日比国際児」のアイデンティティが学術研究において議論の遡上にのることはほとんどないまま今日にいたっている。

筆者はこれまでフィリピンを中心に、アジアにおける「移住労働の女性化」の諸相とその帰結とを、主としてフィリピン人女性移住労働者の社会移動や、世帯内での評価を含む社会的地位達成の観点から理論的・実証的に研究してきた。本研究はこれらの研究成果を有機的に展開し、「日比国際児」を、アジアにおける「移住労働の女性化」の中でもきわめて日比間の移動に特化してきたエンターティナーの国際移動の「帰結」として位置づけた上で、「日比国際児」と呼ばれる子ども／若者のアイデンティティ構築のあり様を、国際社会学の視角から検討し、トランスナショナルアクターとしての「国際児」の位置づけを試みるものである。

２．研究の目的

本研究は、日比双方に在住する「日比国際児（Japanese Filipino Children:JFC)」と呼ばれる子ども／若者が、自らのアイデンティティをどのように構築しているのかを、主として支援組織の役割に着目しつつ、国際社会学的観点から実証的に解明することを目的とした。

具体的には以下の２つの問いに答えることを目標とした。

（１）「日比国際児」と呼ばれる子ども／若者自身が、自らの出自やアイデンティティをどのように受け止めているのか。

（２）これまで「日比国際児」の権利運動を牽引してきた支援組織は、子ども／若者のアイデンティティ構築においてどのような役割を果たしているのか。

（３）（１)、（２）の問いは、子ども／若者の在住地の違い（日本あるいはフィリピン）とどのように関係しているのか。

上記の問いに対して、以下の仮説を用意した。「日比国際児」というアイデンティティは、支援組織に関わることを通して、時間の経過とともに子ども／若者に意識化され構築されていく、動態的なものなのではないか。す

なわち、「日比国際児」という概念は、日比間の女性の国際移動を具体的な契機としつつ、その後の日比双方における支援運動と当事者とのトランスナショナルな相互作用過程の中で生成し、それが当事者にアイデンティティとして認識されていくという、それ自体トランスナショナルな過程において構築されている。

３．研究の方法

本研究では当初、「日比国際児」のアイデンティティ構築と支援組織の役割についての「日比比較」を行うことを目的としていた。しかし結果的に日本国内での調査を十分に実施することができなかったため、フ「日比比較」の視点は次回の課題（2011 年度採択若手研究Ｂ『トランスナショナルに構築される「日比国際児」のアイデンティティとキャリア・プラン』）に引き継ぐこととし、本研究では主としてフィリピンに在住する「日比国際児」のアイデンティティ構築に関して調査を行った。主たる調査対象は、筆者がこれまでボランティア・スタッフとして活動に携わってきたマニラに拠点を置くＮＧＯ、ＤＡＷＮ（Development Action for Women Network）に所属する（あるいは過去にしていた）13 歳以上の子どもたちである。使用言語はタガログ語および英語である。

具体的には以下のような調査を実施した。

（１）①「日比国際児」と自己認識する／しないに至った経緯、②支援組織との具体的な関わりの有無、を軸とした非指示面接調査及びフォーカス・グループ・ディスカッション（ＦＧＤ）

（２）支援組織に属さない（あるいは過去に所属していた）日比国際児へのインタビュー。

（３）以外の支援組織に所属する日比国際児に対するＦＧＤ

（４）DAWN（Development Action for Women Network）の活動への参与観察およびインフォーマル・インタビュー

４．研究成果

本研究によって得られた知見は以下に整理される。

（１）フィリピン在住の子どもたちの「日比国際児」としての自己認識は、①支援組織のさまざまな活動に参加すること、および②支援組織における日本人支援者との交流、の中で徐々に立ち上がってきている。

（２）特に日本を訪問する機会を得た子どもたちは、日本社会で暮らす人々との接触によって自らの「日本」のルーツを意識するようになっていく。と同時に、「フィリピン」のルーツの存在が再認識される契機ともなっていく。

（３）子どもたちと母親とでは、支援組織に対する期待の内容が異なっている。

（４）フィリピン在住の日比国際児の間での「自助意識」の生成が顕著である。

（５）それは「日比国際児」としての自己認識が、個人の水準から集合的なレベルにまで展開されはじめていることを示唆している。

以上の知見から、以下の結論を導き出した。

フィリピン在住の日比国際児者が自らを「JFC」として認識する上で、支援組織とのかかわりが重要な契機となっていることが発見された。また、支援組織とのかかわりの中でも、特に日本人支援者や来訪者、日本での交流活動の経験などが、「父親が日本人で母親がフィリピン人」という客観的な条件を越えた彼ら・彼女らの「JFC」としてのアイデンティティ構築過程を構成していることがわかった。また、子どもたちの学校と支援

組織、そして家庭での自己認識はそれぞれ異なり、特に支援組織が、他の子どもたちとの出会いを通じて最も強く「JFC である」という自己認識がなされる「場」であった。

この結論は、換言すれば、「JFC のアイデンティティ構築過程は、日比間のトランスナショナルな支援運動のネットワークの中に見出される」ということになる。これは、特にトランスナショナルなシティズンシップ、という概念との関連において重要である。近年、シティズンシップにおける「アイデンティティ」や「実践」といった動態的な側面からの考察の必要性が論じられている（Siim, Birte, 2000, *Gender and Citizenship: Politics and agency in France, Britain and Denmark*, Cambridge: Cambridge University Press. ）本研究で明らかになった、支援組織とそのトランスナショナル活動を「場」として生成された日比国際児/JFC のアイデンティティ構築の過程は、トランスナショナルなシティズンシップを動態的な側面から議論する上でも重要な意義を持つことが示唆される。今後は、シティズンシップ論の観点から日比国際児のアイデンティティについて理論的に検討していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

（１） 小ヶ谷千穂「再生産労働のグローバル化の新たな展開－フィリピンから見る『技能化』傾向からの考察－」『社会学評論』60 号第 3 巻、2009 年。364－378 頁。（査読有）

〔学会発表〕（計６件）

① OGAYA,Chiho,“Transnational citizenship of Japanese–Filipino Children: Dynamics of the construction of their identities and the role of the support NGO”, *International Conference on Human Reproduction and Citizenship in Global Era,* Institute for Gender Research, Seoul National University,April 22,2011.（招待講演）

② 小ヶ谷千穂「JFC になっていく」ということ：在比日比国際児と支援組織の関係をめぐって」第 83 回日本社会学会大会、2010 年 11 月 6 日、名古屋大学。

③ OGAYA, Chiho, “Transnational Migration and the “challenged” family and nation---Japanese Filipino Children and their mothers’ movement “,*Association of Asian Studies,* March 28,2010, Philadelphia Marriott Downtown, U.S.A.

④OGAYA, Chiho, “Toward the actual empowerment of immigrant women: experiences and challenges of Filipino women in Japan”,*2nd Metropolis Women International Network Forum,* Oct.23,2009,Hotel Siela、Seoul, Korea（招待講演）

⑤小ヶ谷千穂「フィリピンにおける日比国際児/若者（Japanese Filipino Children/Youth: JFC/Y）の運動―アジアにおける人の国際移動の新たな展開―」立教大学平和・コミュニティ研究機構 国際会議プログラム 「東アジアにおけるトランスナショナルな市民社会形成のための政策をめざして ―日中韓３国共同研究―」2009 年 7 月 19 日、立教大学。

⑥OGAYA, Chiho, “ Migration and the "family" challenged: Japanese Filipino Children and Their Mothers’ Movement”, *International Symposium “Asian Women and Family Change in the Era of*

Migration", August 21,2008, Ewha Women's University, Seoul, Korea. (招待講演)

〔図書〕(計 4 件)

①OGAYA,Chiho、이주, 그리고 일본의 도전받는 '가족' (「移住、そして　日本の挑戦される『家族』) 梨花女子大学アジア女性学センター企画『글로벌 아시아의 이주와 젠더 (Migration and Gender in Globalized Asia』第11章所収。Hanoul books (Korea)。2011年。422頁。

②小ヶ谷千穂、「フィリピン人ディアスポラ―曖昧なニューヒーロー/ヒロインと国家」(駒井洋監修・首藤もと子編著)『東南・南アジアのディアスポラ』(叢書グローバル・ディアスポラ２) 第2章所収。2010年。明石書店。288頁。

③小ヶ谷千穂、「『外国籍住民』から見る日本―国際社会学からのアプローチ」、横浜国立大学留学生センター編『国際日本学入門～トランスナショナルへの12章』第12章所収。2009年。成文社。228頁。

④ 小ヶ谷千穂、「JFC劇団「あけぼの」日本公演ー地域と外国籍住民のネットワークと文化活動の結節点として」中牧弘充・佐々木雅幸・総合研究開発機構編『価値を創る都市へ：文化戦略と創造都市』所収。2008年。ＮＴＴ出版。290頁。

〔その他〕(ＮＧＯ機関誌記事)

⑤ 小ヶ谷千穂「ＪＦＣ/ＪＦＹの現状と新たな局面」移住労働者と連帯する全国ネットワーク機関誌『M-Net』第 133 号。2010 年 10 月。

６．研究組織

(1)研究代表者

小ヶ谷　千穂 (CHIHO OGAYA)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：　00401688

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：